

聖書：Iサムエル24：1～22

説教題：主が報いをされる

日時：2017年5月28日（夕拝）

前の23章でダビデはまさかの救いを経験しました。サウルに追い詰められ、今度ばかりは万事休すと思われる状況でした。ところがギリギリの瞬間に「ペリシテ人がこの国に突入して来ました！」との知らせが入ります。このため、サウルはあと一步のところまで迫りながらダビデ討伐を断念し、引き上げざるを得ませんでした。ダビデはこの神の守りを記念して、その場所を「仕切りの岩」と名付けたことを前回見ました。

続くIサムエル記24章。ペリシテ人との戦いを終えたサウルは再びダビデ追跡を開始します。ダビデがエン・ゲディの荒野にいるという情報をつかんだサウルは3000人の精鋭をえり抜いて出かけます。一方のダビデとその部下はおよそ600人(23章13節)でしたから、その5倍にあたります。今度こそは逃がさない！というサウルの意気込みが見て取れます。そんな中、またしてもまさか！と思われるような出来事が起こります。3節を見ると、サウルはダビデを捜している途中で用を足したくなり、一人であるほら穴へ入って行きました。すると何とその奥にダビデとその部下が隠れていたのです！サウルとしてはひっそりした暗やみの奥にダビデたちがいるとは露ほども思わない。明るい場所から暗いほら穴へと入って行ったサウルに奥の様子はさっぱり見えなかったでしょう。しかしもともと暗いところに潜んで目が慣れていたダビデたちにとって、入って来たのはサウルだ！とはっきり分かる。そこでどうしたでしょう。ダビデの部下たちは、「今こそサウルに手を下すべき！」と進言します。彼は今一人です。護衛兵もいません。用を足して無防備のところを一気に突き刺せば、すべてが決着します。これこそ主が下さった特別のチャンスです！今こそその時です！と。

4節後半に「そこでダビデは立ち上がり」と記され、いよいよ彼はそれをするのかと思って私たちは緊張しながら読みますが、続くところには「サウルの上着のすそを、こっそり切り取った。」と記されます。これは一体どうしたことでしょうか。さらに5節では、ダビデはこのことについて心を痛めたとも書かれます。そして部下のところに戻って来て、「私の主君に対して、手を下すなど、絶対にできない」と言い始め、7節では部下を説き伏せたとあります。なぜダビデはこのチャンスを生かさなかったのでしょうか。部下たちが言ったように、これは主が備えてくださった時だったのではないでしょ

うか。ダビデも最初はそう考えたようです。だからサウルに近づいて行きました。しかしその途中で、これは神の御心でないと判断するように変わったのです。なぜ御心ではないのでしょうか。ダビデはこう述べています。サウルは主に油注がれた人であり、その彼に手をかけることは、主に逆らうことであると。聖書の様々な箇所を示されている真理は、私たちは主が立てられた人に対して主に従うように従うべきであるということです。主がその人の背後に立っているのを見て、主に対するようにその人を敬い、また従う。それゆえ油注がれたサウルに手を下すことは主に対してそのようにすることです。ですから一見奇しいチャンスと思われたこの状況は、サウルに手をかけるために主が備えた時ではないとダビデは判断した。そしてその判断は正しかったということはこの箇所は語っています。

私たちはここに大事なことを教えられます。それは私たちの目にチャンスと見えることは必ずしも主が導いてくださったチャンスではないということです。私たちは日頃から祈っていたことが実現しそうな状況が目の前に現れると不思議に思い、これこそ主の御心だ！と言いやすい。しかし早合点は禁物です。本当にそれは主の御心なのか、私たちは聖書に明白に示されている主の御心全体と照らし合わせて考えなければなりません。そしてもし他の主の御心とぶつかる点があるなら、それはいくら奇しい導きと思われても主の御心ではないと言わなければならない。むしろそれはダビデがここで言ったように、主に逆らうこと、御心に反する道を行くことになります。

たとえば結婚を祈っているクリスチャンがアルバイト先である日、突然素敵な人からプロポーズされる。考えてもみなかった素敵な男性あるいは女性です。こんなことはもう他には考えられないからこれは主の導きなのではないか？私はずっと祈って来てこの状況が与えられたのだから、とその人は考えるかもしれません。しかし私たちは不思議な状況が起こったということだけで考えるではありません。結婚に関して他にも考慮すべきことが聖書に示されています。それと一致していなければ、目の前のことは主の御心は言えない。むしろそれは悪魔の誘惑かもしれない。あるいは仕事やパートにつきたいと思って祈り始めていたら、ある人から突然条件の良い仕事を紹介された。時給も高く、私の能力も生かせる。今時こんな仕事はないから、これは主が備えてくださったお導きではないか？しかし同じように、本当にそれが主の御心かどうかは聖書に示されている他の原則と合致するかどうかによって慎重に考慮されるべきです。それはどういう内容の仕事なのか、その勤務形態はどうであるのか。その他にも私たちの目に、これは

特別のチャンスだ！と思われることがあるものです。しかし私たちはその時、すぐに「主の御心！」と言わず、ちょっと待てよ、と考える習慣が必要です。それは誘惑であるということはないだろうか。動物が仕掛けられたえさを見つけた時、どう思うでしょう。こんなところに普通、食べ物があるはずはないのに、これは特別な導きだ！神のお計らいだ！と目を輝かせるかもしれません。しかしそうして食らいついたら一巻の終わり。それは罠であったことが判明するだけです。ですから私たちも注意しなくてはなりません。何か新しい状況、新しい導きが目の前に提示された時、聖書の教え全体との関係の中で、本当に主の御心と言えるかどうか、祈りつつ考えてみるべきです。そしてもし聖書が示す他の原則と一致しないなら、それは主のみこころではないと考えるべきです。その罠に対しては、ダビデのように退けることこそ祝福の道に行くことです。

さて、ダビデはこのようにサウルに手を下しませんでした。彼がそのようにしたのは、もう一つの聖書の原則に基づいていたからであることが 8 節以降から分かります。ダビデはほら穴から出て行ったサウルに後ろから呼びかけ、上着のすそを見せながら、私はあなたを殺すことができたがそうしなかった、またこれからも手をかけることはしないと云います。ダビデはなぜこのような態度を取ったのでしょうか。私もあなたに手をかけないからあなたも私にそうしないで下さいと取り引きするためでしょうか。ダビデがサウルに手をかけなかった理由は 12 節と 15 節に語られています。それは「主が私とあなたの間をさばくさばき人だから」ということです。ダビデは危うく勝手に裁判官の席についてサウルに実刑判決を下そうとしましたが、さばく権限は主にのみある。主をそこから追い出して、任命されてもいない者が勝手な判断を下してはならない。聖書は主が必ずふさわしいさばきをすと言っています。ローマ 12 章 19 節：「愛する人たち。自分で復讐してはいけません。神の怒りに任せなさい。それは、こう書いてあるからです。『復讐はわたしのすることである。わたしが報いをする、と主は言われる。』」

ある人は不敬虔のエッセンスは、自分が神の位置に取って代わろうとすることだと言いました。神を神とせず、自分が神になって、采配を振るおうとすること。アダムとエバの罪はまさにそれでした。逆に真の敬虔とは、神に属することは神に属することとし、それについては神にお委ねし、従う生活をするということです。確かにサウルは主に油注がれた人とは言え、罰されるべき罪を犯しているでしょう。しかしその彼にさばきを下すのは神の仕事であって、私がしゃしゃり出てなすべきことではない。「復讐はわたしのすることである。わたしが報いをする。」と主は確言しておられるのです。

私たちはこの「主こそ私たちのさばき人である」という真理を改めて良く思い巡らすべきでしょう。そしてまず大事なことは自分自身も主のさばきの下にある人間であることを思って、恐れを持つということです。私たちは自分のことは棚上げて、誰かの悪だけを思い、主よ、あれをさばいて下さい、という思いを持ちやすいのですが、忘れてならないのは、私も主のさばきに服すべき人間の一人であるということです。私のことはいいですから、あの人のことだけさばいて下さいという都合のいいお願いはできません。私たちは真のさばき主を見上げている者としての歩みをしているのでしょうか。先ほど参照したローマ書 12 章には「悪に悪を報いることをせず」とか「自分に関する限り、すべての人と平和を保ちなさい」とか「あなたの敵が飢えたなら、彼に食べさせなさい。渴いたら、飲ませなさい」と言われています。主はそこで私たちがどのように行動するかを見ておられます。そして御心にかなう歩みをするならそのことを評価し、また報いてくださいます。私たちはその神の御目の下にあることを覚えて、まず自らが恐れ、主のご命令に従う歩みをする者でなければなりません。

このことを確かなものとした上で私たちが持つことのできるもう一つの確信は、主は悪に対して必ずふさわしいさばきをなさるということです。さばき主なる神は御前で行なわれた悪を決して見過ごしたままにはされません。それらをつぶさに見ておられます。私たちはせっかちなので、自分に悪を行なった相手がすぐに何らかの制裁を受けないと、主は見ておられないのではないかと不安になります。しかし主ははっきりと「わたしが報いをする」と言っておられます。ですから私たちはその「タイミング」「時」と「方法」を主にお委ねして安んじていれば良い。主は必ず正しいさばきをなされるのだという信仰に生きる時、私たちには何という慰めと平安が訪れるでしょう。

さてサウルはこのダビデの言葉をどのように聞いたでしょう。16 節以降を見ると、サウルは声をあげて泣いたとあります。そして、あなたは正しいと認め、また私は悪い仕打ちをしたと認めています。サウルはダビデの言葉に接して、なぜか胸のわだかまりがスーッと消え、ある意味で子供のような素直さを見せています。ここだけ見るとすべてがうまく行ったかのようです。しかしそうでないのがサウル。この後、またダビデを追跡し始め、26 章では今日の箇所とそっくりのことを繰り返します。ですから私たちは敵に復讐せず、ダビデのように振る舞えば、物事はうまく行くと甘く考えることはできません。現実はその簡単ではありません。忍耐が必要です。しかしこの後、長い目で見て

行くと分かりますように、神は確かにすべてをご覧になり、ダビデへの祝福を下さいます。ですから私たちは誰かとの関係で1回2回うまく行かなかったからと言って落胆せず、必ず報いをされると言われる主に信頼して行くべきです。そしてここで重要なのはサウルの口から20節の言葉が語られたことです。「あなたが必ず王になり、あなたの手によってイスラエル王国が確立することを、私は今、確かに知った。」 サウルの言葉はいいかげんであてにならないと言うのはその通りですが、それでも自分を敵視し、迫害していた者の口から、このような言葉が語られました。これはダビデにとって、さらに神の約束を確信させるものだったのではないのでしょうか。自分の手でサウルを殺さず、主にお委ねした時、ダビデは不思議な形で「あなたは必ず王になる、・・云々」という主の約束を改めて聞くことになったのです。

以上のIサムエル記24章。私たちはここから単に状況を見て、そのことから自分の勝手な考えで主の御心云々を判断しないように！と教えられます。自分の目に良い導きと映ることは必ずしも主からのものとは言えない。自分の願望でその新しい状況を解釈し、軽率に「主の御心ではないか！」などと言うことがないように。まずは明白に示されている他の真理、聖書の御言葉に沿って捉え直すべきことを教えられます。そして私たちの思うように行かない状況にあっても私たちにとっての慰めの真理は、主がさばき人であられることです。主はすべてを見ておられ、必ずふさわしい報いをされる。その主の前にあることに恐れを覚えつつ、またその主の前にあることに喜びを抱く者でありたいと思います。より頼む者にとっては、このような主がおられ、すべてを支配しておられることは大きな慰めです。その主が「わたしが報いをする」と言ってくさっています。「主を待ち望め。その道を守れ。そうすれば、主はあなたを高く上げて、地を受け継がせてくださる。あなたは悪者が断ち切られるのを見よう。」(詩篇37:34)